



年山紀開
二



刻年山紀聞序

先輩年山安藤子以冠冕之裔長于輦轂之下
與其兄素軒並以通典故見稱及其應聘本藩
也入則侍

義公出則在史局徧接一時名士又嘗屢奉使
京畿之間常與契冲師周旋異聞不訿其平生
耳目所覩記隨筆為冊凡六名曰年山紀聞鳴
呼久者易失遠者難記年山沒距今殆百年猶
如交臂一堂聽其晤語者獨賴此書之存則不
亦幸乎且其萬葉諸說以下稱



義公之言者雖率出一時談話之餘亦皆滄海遺珠崑山片玉尤可珍也近時此書頗為世所推傳播千里而讀者或恨其多謬誤頃有京人欲上梓者就肥後守橘朝臣謀諸余余喜其舉取年山手書原本謄寫一通以贈橘君時素軒玄孫為端在京師為橘君門人橘君即使為端重校再訂然其書固屬一時隨筆詔涉疑似者亦不少皆存其舊不輒改之云余嘗西遊與橘君有舊因使余序其由故題卷首

寬政十一年己未春三月

水戶 小宮山昌秀序

友人 吉田尚典奉助書

年山記開は年山安藤為素持士乃筆。由ら
と記するは法なり此法めつゝなる又好む人法
志もさうやあかん半ぬよたらう更りともふの記と
全表に彰考録乃以て法とやみることかあぐなん
おほしと放りるをたらたり其素持乃実持
士乃乃のこる端ぬ一橋本経危ぬ一又記ひく
玉つまふひする人し阿な色い動めと破出本紙
ちうし出しく中ういよとむしなり九世子
信守てふそのい多うあれとほつたゆりといは
こ一も素持乃かといひあふといは信守さうはた
は

年山紀聞 第一

目録

西山

和歌と関字

詩歌の懐紙

公事根源

小児の顔とむす字

十二ひやう

菊法歌

壺のやうゆ

よやくと勢

七十賀

社頭の文臺

神武天皇御製

眉ぬきと歯と海免

いそやわは

月代

那須の碑

西山乃沙蘇

盆むかん

うはふみ

旋頭歌

久保はく

天子の謚号

慶徳庵

五氏の是定

中古姑冠

河部仲丸の詩

後鳥羽院御製

三十六人集

くそーに

わーく

物の名

婚嫁の和歌

栞雨

無辰 筒辰又六辰

兼實公俊成卿贈答

貝の歌書屋

伊勢の三人

松虫鈴

伶人演

代匠記の序 糸珠庵 契沖

傳國重

擬階の奏

歌のゆゑ

徳士正惠

官底

藍尾

節儉

年山紀聞 第一

○西山

常陸の国久慈の郡右田の郷東西にあたりて十町より
少しも阿なをく白坂といふ里の奥より久戸府城より
右田までいふ里なり

梅里公常山と稱す二所山と称す

元禄四年辛未六月あり于時新橋中納言

其れよりあよふあひのあはきりくはとあり去成たひ
うりて松ありと森かたう新橋行ゆめる鹿ありとあ
ね新ゆう海へ入り此ゆかまの時からきる櫓とあり
也一たふとつるまはひの終の母とていふお山のあま



と海を久慈の海をよや入きありゆりけを今
その海をよや一里ありゆりま一陸谷の愛を
うらむかたに事なる一山よ入らせたまひて後
の詩をよや

西山樵夫よよかたにまふりあふらむ一もむらび
尤ありは痛つあそ府城のまらま塔うたれとま川うよ
ふ六十人をありえらひはらひせたまふ人く松を
家指とくく一あ谷のうらむく松のまらまかりとめ
なりり物まらむくま川うひあれとあ桃源の仙御まか
くやあらむ一あむとゆり新とのひらうはらむく白雲
たててあまらう池一松鴨をくはらうりそ谷あひの田

此面よ丹波の約ひらうひ屋一あまらうりね
りそお小いふりなまの書けおの割物を一ゆ友をひ
よは彰考館江戸小石川の藩邸より忠学若きう四六人ははかより
うりわよあうて詩をれ唱和あひひ本朝史元新第
系集以下編集の撰論まかりあらう一ひ月よう
ゆり一あまらう一神藏出家れまわく此頃常陸公
うらひのふらむも及らむはなよりもちうよまらむよりと年
に海ゆえらむを得る事あつひありて学問をよ
これの物よらむらむもあまらうのうきて神在滿の四時
らりの中くあはむつひまらむれまらむ中よらむ
あまらむらむ十とせに及ひて元禄十三年十二

壽燭式樹

長壽香式百枝

壽麩壹筥

壽桃百顆

仙禽雙翼

壽酒朋樽

壽詞壹章

奉申

賀敬

前權中納言西山源 御譯拜

これより別紙也

賦短律一章恭奉祝

中院前亞相古稀初度

七旬華旦月南極

爛儲精輓々蒲輪

輾飲々槐木榮嚴

霜高氣節藝圃檀

歌名仁者元惟壽

何為羨老彭

庚辰四月十三日

前權中納言西山源 御譯拜

大納言殿より和歌一首奉申

和壽章芳歌和歌

敬位深通茂

和の多きやわのうたやうたふ

七種とわとしははる宗持

程も崎一和

かきつらかく君もあふはれ

ゆす坊のあつくとあはむ

ふせも宗一と

まてともふれあけう

くじは浅くはぬ

せよ七十のうた

あ〜ぬ名と

○和歌小園字

宣胤御日記永正四年閏十月一日云自濃別左清門御
基音卿状お來先日返奉也有歌

心あはれ 君〜さらぬあふ〜せあふ

あつとあはれあふ〜うたも〜を〜持川

被状云歌三箇字平出奉近代あふ及ん公安を〜

少と〜を〜依〜は〜但〜京極黄門建仁元年〜度奉

月照相〜云歌〜

け〜の〜おは

君成あ〜を〜名〜山〜より

相〜う〜月〜の〜名〜よ〜出〜け〜

上如也公不見以沙不見事以之取及以方者門
自第信帝先手於此金名許一見了誠公宴可放
實孔平出まて八歳まゝ事也

○社頭乃文臺

明月記定家卿建永二年三月七日云沖華賀茂社有
牙合以排枝為之其枝本向沙社方以木葉回可為上
之由有御之儀了又幸上沙社有歌合以松枝為文臺

○詩歌乃懷紙

岡屋閑白謙經日記建長二年六月廿七日余詩書樣如斯
書高檀紙

夏日同賦聖恩覃草木

應製一首以采為韻

攝政從一位臣藤原朝臣兼經上

我后聖恩人識否遍覃九
草木萬方平殿前再八
奏金芝色省下重開八
瑞折榮去吳氏風傳八
盛德沙陽縣月契長生九
微臣扶老侍斯席悅矣九
今宵雅頌聲

元長卿日記永正三年二月七日

賦耕於東郊各分一字

詩探得翁

權中納言元長

天氣降和春雨濃平

田水蘸識年豐勸農

只在東郊舍耒耜荷耒

白髮翁

同五年正月廿六日內裏之御會

春日同賦宮梅動

詩興詩以紅考韻

宮樓簾帶帶香風樹々

梅花白又紅御宴最宜

動詩興羅浮春色滿樽

中

宣胤卿日記文龜二年正月二十日禁裏御月次

御會

春日同詠竹不改色

和歌

權大納言藤原宣胤

うたふて君ろ子

と色は春をむす侍

於乃多事の帝御嘉

春を承

名字ハ吾ヨリサ
サカルヘシ

此字ハ今日者
不給又未ニ字ノ事
而加テ為ニ字ノ事
依人ハ就今ハ
異多計ト云ハ

二水記

鷲尾隆康
御日記也

春日詠花色春

久和歌

從二位藤原隆康

長閑なるはるふと遠

心よりとけふ乃花

小くくはれ子代末

陸加那

中敷中今以第久間不書
應制原上弓と字

高松氏二枚りま書こり
言サ一入守二分揚作ノ

ハシニ寸むら斗ナリ
高松氏脚ニ早間一寸ア

二枚ナリ
情ありは古々を定極ま
難ゆま方中全テ書し年

二枚まみそ又空書中丸
も書附料ありしか難為同

此等皆め造古リモ又カガリ
ト云いともな人々亦為區々

○神武天皇沖製

人の世にありて三
十一宮はく一也也

古事記

若原はるけとよ小座も愛たみりややあてまらぬより祿

あねの伊瀬氣余理能は杖井河大和郡乃家乃幸

を舟の一宿沖寝すして後よ余理能入内一むひきる

時よせくもつと志事こたハ鯨さねり愛多みを菅

墨きりの屋さやハ除清くく若墨八字おき向ふ外の

舟一清浄なる内もなり河もく若鯨り多るほりの

小座上古おの川く賀家の舟きとゆり也一余理能ハ

事代主祿のむをめ神武の嫡座りく安清天皇は御

母君をりあきとると皇統万々世も傳りて日のもとあり

ひるにあまねく照をせ舟ハ杖井河の波ハかろ出雲

八雲もな舟ならまありてお舟え舟まハ王道平林り

きふと舟をなす神製あり也一若く若婦古人倫の初

り又子と弟君臣朋友は道もあらん基ひきれば聖人
やうて別の家族もく教をまゝ傳へり心ある人々とい
—を回正し傳説をよとあるなり

○心事根元

お清書を後成恩寺殿 兼良公の標よのちひゆりはふ
ろ新ららちよん年中の半秋合の集去りて後普光園
院殿良基公は能きなりそれと兼良公抄出して歌号は
あゝあゝ將軍殿まのせりれゆりあはれ

○眉ぬき歯くぬ先

崇文朝日記寛弘五年十二月のきくはるゆりねははかた
いゝゝはくぬきいはくぬめつあゝあゝとてはよのけい

とゆきとてうらとけわとてたま とうかぬとて

伊名お祥新考館の
ゆが谷丹を再あり 法中うまゝかからゆりてをきとて候と

かききれあゝとてんまは河まのわとぬきとてからる
了眉ぬさうゆつあそく女ひれをばさハ云 建内記

時房云
日記 永享二年十二月のきくはるゆりねははかた 有祝兼事歯久呂

美三筆印付勅え眉元ヌリ半母乞ノカ次ニ献云

按よりとてりかゝるやい源氏日記をくゝり後よ能る州
あゝあゝ宣耀殿実ハ
男也 檢中納実ハ
女也 兄妹とてりうて

作まり

○小町の額よなり字

大府記為房の
日記 康和五年八月廿七日云東宮遷御高松

第戎四刻沙出宗通卿沙親奉書大宇先日女房等仕
為房心持子息顯隆卿日記之戎刻の語依可也河也
都古人幸以市為沙使彼申院

為章梅より大宇瓜かゝるの瓜河也故古人とかくも
ソハ字んがし

○いしやわかは

古聖門万葉文七よみ人等いしやわかはと云ふ事我ハかゝんと云つ成を
沖釋云いしやわかは唯若と云ふ河ハ岩あり河門也
才十三よ川の流注いとわたりてくよわたりてく
石あり岩門ハあり石ありいしやわかはと云ふ事
流々日本紀累の云天皇初將討賊次于柏峽大野其

野有石長ハサカ廣ササカ天厚ササカ一尺寸天皇初之曰朕將滅土
蜘蛛若將蹶茲石如柏葉而舉焉因蹶之則如柏上於大虛
故号其石曰踏石也シヨカチこれ小傳のハハハハ又ほめて玉相と云ふ事

○十二心

は名目ゆる記物と見えしはと深年盛衰礼卷四十三
を於東ニ女院ハ中燒石沙視箱と沙袂小宿ヤトシ合勇フムク重ノ
ツキテ海ニ入ラセ給此間此間流生未事をハ友重ノ十二
單ノ中衣ヲ召云

○月代

玉海日實云安元二年七月八日建春門院為沙の記とい
く自件ノ席中時忠卿出首之幣不正月代をメ示た大后
足苦面色殊快

以下云ト畧

為章梅より小村忠之と女院は兄あれたは篇中へ
入るべきは所へ一月代的事あるものなは記
しめたるをてり撰集抄ハ西行法師の記り
但後人の語今これをも月代との事あり
おりまあり

○菊の歌

菊の集は一首をみえんはれはち梅武皇の御製
以類聚國史七十巻を載りていそく延暦十六年十月
癸亥曲宴酒解

皇帝歌曰己乃己呂乃志真禮乃阿米余菊乃波奈知利
曾之奴倍岐阿多良菴乃香乎賜五位已上衣波

今梅いもと菊の花を九月中にありくは未だあり
十月までありとなり菊の集は法隆廢帝天平寶字
中まその子に載りてさるる一そをもえりは祿徳光仁
の御代ありひを桓武はちありあり菊の
ころりてありや

○那須の碑

墓の隆八間横七尺碑のち四尺守潤を人守
厚八寸八行十九字とて百五十二字

永昌元年己丑四月飛鳥浄御原大宮那須國造追大壹那
須宣事提評督波賜采次庚子年正月二壬子日辰節彌
故意斯麻呂等立碑銘云余
仰惟預公廣氏尊胤國家棟梁一世之中重被貳照一

命之期連見再魁碑骨視髓豈報前恩是以曾子之家
無有嬌子仲尼之門無有罵者仍孝之子不改其報然夏
竟心澄神照乾六月童子意者助神作伎之大合言喻享
故無翼長飛無根更固

右那須國造碑在下野那須郡湯津上里碑云永昌
元年己丑月死為淨見爾大宮那須國造追大壹
那須宣事托拜督被賜歲次庚子年正月二壬子日
之私考

辰節除故意斯麻呂等立碑貞享四年之秋平君命
至那須親寫碑文元年上二字不甚分明乃摸印見之永
昌二字也然本邦無永昌號焉我為淨見原天武朝也
天武有朱鳥號永昌字形相似朱鳥想是歲月之久字
跡訛缺也因推為朱鳥歸後考之朱鳥元年歲在丙
戌而此曰己丑則非朱鳥也明矣今按唐武后永昌元年
歲在己丑而當持統三年此時本邦年號闕故假用異域
年號乎除故二字於義不安疑是物故之訛乎庚子年
是文武四年也蓋那須國造天武朝人物而歷仕持統文武
考也凡上世碑碣今存于世者此碑與陸奧壺碑也而壺
碑為好事者從摸寫此碑在荒墳茂艸之間無人識

之者自非我 君侯好古之深 安得傳之世間乎 死者
若有知那 湊國造竹之然於地下焉

○壺碑

奥別宮城於市川村あり依之命を仰宗淳元年
西山公乃命とありゆりて一夜のたれよお祈よりてこれとて
一ゆりぬと加熟言サウ人守棟定人一寸厚二尺

多賀城

去京一子六百里

去蝦夷國界一百廿里

去常陸國界四百十二里

去下野國界二百七十四里

去靺鞨國界三子里

此城神龜元年歲次甲子梅察使兼鎮守將軍任位
上勳四等大野於東人之所置也天平寶字六年歲次壬
寅大織東海東山節度使任四位上仁部省卿兼梅察使鎮
守將軍藤原惠美朝臣朝獨修造也

天平寶字六年三月一日

梅察使大野東人の仇職を果安の子なり天平十三年
十月卒に朝獨を惠美押勝り三男あり寶字八年九
月十八日誅ちまはり天平寶字八年神天宮於年号
六年八廢帝即位乃四子なり靺鞨公舊唐書北狄傳
よんえり在京師東北六十餘里東至於海西梅察使
南界高麗北鄰室韋とありこれより肅慎北地あり

とく 又按、續日本紀天年勝寶六年の下は孝府
勅一多田乃約禮孤解を有りむし、事有り壺
の碑と有り類と有り

○西山乃冲詠 きぬく礼儀
は有りを事はく

初春雪

うぐいそ花雪の何やともありはて花の衣を本より

春風

おわー池の心を春風は風のまじりて花の衣を

花

花鳥の衣は春風とておわへて花むや春の衣を

山家梅

山あつこ人を同ぬぬ紫戸はひりまは新のひりえ

春月

八重花の川を流るる花を流るる花を流るる

花の川

老らくは男は津舟を流るる花を流るる花を流るる
まのまはあのかたはひりまは新のひりえ花の衣を
白雪乃八重は川を流るる花を流るる花を流るる

雨後花

花を流るる花を流るる花を流るる花を流るる

花

色も香もはは花を流るる花を流るる花を流るる

秋同郭云

やうきほなく一聲よ中あそくわくくはてぬ爰はま橋

後、秀玉詠藻をねん一はるたふのほくくまのしきり
西山云々いづくはあ村 仲彦は素雅君の四方まのせられたる
ちりあはれ沖彦并に いづくあかへ一ふらたわくくまの
ういのそくまゆりあか 秀玉詠藻 素雅君の沖集なり

夕又立

夕せらけ風よきはひてなる津のあそくあそく雲のひ橋

山家納涼

石そくくを涼一な山里乃わけひいあそく在れぬ水

秋畧

風のおこもまる秋浅よ草は戸を秋ふあ同き一しぬて

月あ草苑

露ひきふ尾まれう末風吹風いえ初月れをうあそく

空同月

きらぬを王津が女お言の袖はあまうてりる月を

八月十六夜那珂乃湊よそ

あまうけ月をえけの浦風よきも秋あけけうをわか
あまうけ月をえけの浦風よきも秋あけけうをわか

月乃秋人くまひをそ末竹あくくゆりたれ

初雲えをらうあつあついと非お言まみの月乃秋乃

晴夜同馬

むくまのよわくかやあれをけからをぬあそくの一はら

池を紅葉

重むるふ衆より後の程も又何れはつらきものかと
あま

これぞわらわらもわらふ衆と吹中た風とさける山里の庭

埋火

祿よりある板間の下へ一考をえてわら世も埋火の

百祭は初ととりて海とつらき

天をたそへのさみそふくとおれとつらきたのた

心を流る自清浄といふ事

幻河は清よなり祿のつらき心のあまかりひと

上を章う江戸より付来りん

わら世も又もつらきとつらきとあまの祿とさる人

沖中大炊に於難の言とすまひて

いふと世とつらきと世の中のをたつらきとぬと

禰義氏お家人身まると

と茶野やとつらきとつらきとつらきとつらきと

いふとつらきとつらきと

凡飯といふつらきとつらきとつらきとつらきと

大樹殿下 憲庵乃侍勝禪徳院去建法印と

西山(まの)つらきとつらきとつらきとつらきと

荒波山志げよとつらきとつらきとつらきと

は多いとつらきとつらきとつらきと

ふ代まといふつらきとつらきとつらきとつらきと

むぐむよりのめきは歌

今梅時正を彼岸といふ事あるくちをぬり

○ういゆ

又いづく道徳母は時西出の内侍はうむのまより病をなす

うまいたんばそくかみしてういゆは西出ありてういゆ

いづかひせん 上下界

今按日本紀をも類しカキ長きりとの世ははつらまひ

伊予物産はういゆむむあかきかよと

河まはとあき河也

○か

又いづく月をながくういゆはういゆをせむ

いふあつたれがもめれたまきあそんか

女は文かかきりちりちりなり日本紀に志懼の家紙ナナナ

かかきりちりちりちりなり阿那志アナシのふあなち

就乃自得まき切る時の河にあまの誠志をいひじゆ

家紙修そ穴潰ちりちりなりけつ流ありり

○旋頭歌

美紫古今集ちるるくひあ七七あ七七

續糸裁集よ

俊成

みちり子くおひ一人も老ぬと

そむくせとふかきりさなまうう

か

隆信

有りてねよ。後とうはくえ。きれよふく。

とりれず。あうらる世ふ。うひりありき。

みせみせとよ急るの此外よな。 續草庵集六地籠小

法樂一節一古句法奇

月のひりままする日のひて思中そりかみ

初めとそいひは。晴しはちうひまりたせ

あれたみせせ七小み。と入梅きの日本紀載せたる日本
武尊はあひしちばは。波ささくひく。秋はつるこのふふ
兼燭るのわあて。初はあはれ。秋日やま。只然とせし
連奇の娘とあうら。上下金さく。これ。深江は始とあうら

○物法名

仲文集に紀のむね。那子の辰よめる。伊都なり。那賀なる。

名草 ありた。在田。阿ま。海歌。ひる。日言。む。年漏

ひさう。紀。那。さ。く。と。あ。あ。あり。は。た。な。ん。ん。ひ。は。あ。や

二十一字の中に七那七字とが。なる。初と。ぬ。事。なり

新拾遺集よ。え。あ。う。あ。え。ひ。ら。ひ。れ。あ。や

い。 續人志らん

う。や。う。む。句。よ。え。風。う。ひ。ち。り。さ。て。入。の。あ。い。ひ。と。せ。は

これ。あ。草。庵。集。あ。あ。あ。い。と。く。あ。は。法。作。は。一。は。ん

けり。き。ん。あ。番。なる。事。なり

○みとほく

美。葉。十。二。水。忍。衝。石。心。あ。而。く。り。ふ。秋。の。市。秋。云。延。喜。式。方

六十雜式云九雜波津ハナ海中立シ漂シ字ハ漂シカモ
と名付ル事々其ハ津ノ藏ニ川ハ助カ流ル此方ハ水ノ衝ル石
也かけル忍ノ字不レ害ク青ノ刺シとレ月ノなシ徒ニ
忍シ也一越ル乃ハ字ハ侍ノ字ハのハやハ由リとレや云

今按ル其ハ縣ノ本ハ辰ノかキとレ志ハ一ノすレれハ往ル舟ノそ
色ハ瓜ノ目ノあクおシりナりハ内色ハ其ハ縣ノまシるハ藏ノいハふシりナり

○婚姻の和歌

元祿中久我三位中納言一條殿一藤原一成君一仲婚姻
乃時中納言一中院通茂一代一化一なり

そのひふれ公のほしうわよかゝる岩井の流あひまをい
うたふ成君の仲方野とよ中の定基
御代作

世とぞゆく流ぬ後う海一免一君一井一の流あひまをい
ふ婚姻の贈答も多そくく一なりぬら紙一知一り一
おし一た一ま一事一殊勝一なる一こと一なり

○天子の謚号

親長卿日記後花園院院号定時中院大納言通秀申
詞と乃をいさしり一文一長一り一れ一お一な一と一畧一ハ

凡一福一法一事一起一於一周一道一遠一及一日一城一名一記一神一武一已一来一至一
文武四十二代是法海公不割事已幽命也一後一武一依一
平日之德行謚号或一以一後一院一中一不一記一成一此一二一字一追一号一有一山一
陵一由一儲一有一庵一号一之一遠一報一彼一是一那一一一名一字一

勸修寺前中納言教秀卿申詞あり
方一後一と一時一

如為長仁記若元的天皇救命其國其於可為溢号
之由分明也

○梅雨とみ雨

同記長享二年十月二日和歌披海之記梅雨と云題アリ為富
御ハ音とく梅雨とよみたりと云親長仁と云て其
由と云れと可讀れと云る事あり

乃章梅より古よ家々の集あふむ子守の日記を
よ子の部と云きり而後と云る事ハ三書に記さる
初書と云りり早書と云る事ハ梅雨と云る事
しる事ハ漢字と云書れと云る事ハ
了ら玉芳小と云る古風と云る事ハ梅雨と

親長仁の記にきり梅雨と云る事ハ
一宵雨と梅雨もみも并紫かさの及利と云る事

○廣徳庵

同記長享二年三月三日記廣徳庵四院中代祇
傾貞久三位一昨日死去七十
八兼貞貞久之書影令貞久之臨終年未詳也
不便云祈

沙一と云る事ハ
くは茶と云る事ハ

○龜辰筒辰
大辰

同記明應六年三月廿六日宣流に云る龜辰筒辰又六辰
龜辰ハ藤ノ實辰ハ筒辰ハ藤ノ實ハ字ツリハ
今梅又六辰ハ像ノ佛ニ似たる名目なる事

○王氏は是定

小右記長元四月一日云式部卿親王下被^た賜^は王氏爵^は是定^は是定^は今年^は有^ら朝^は且^に叙^は位^は也^は親^は王^は可^し令^は是定^は是定^は今^は按^は橋^は氏^は是定^はを^はた^は沙^は法^はして^は王氏^はも^も是定^はは^は今^は事^は成^は世^はの人^はあり^はひ^はあ^の式^は部^は卿^は親^は王^はハ^は叙^は平^はなり

○兼實公俊成は贈言

玉海治養四年二月廿日^は叙^は俊^は成^は入^は道^はと^は許^は送^は消息^は自^は筆^は為^は謝^は一日^は之^は遣^は味^は也^は之^は次^は和^は奇^は抄^は物^は為^は券^は契^は可^し傳^は受^は之^は由^は示^は送^は報^は状^は云

ゆりもは^は未^は乃^は下^は外^は此^は後^はは^は事^は傳^は不^は及^はよ^はよ^はの^は條^はを^は傳^は返^は乎

其^は上^はと^はは^は後^はは^は下^は外^は此^は後^はは^は事^は傳^は不^は及^はよ^はよ^はの^は條^はを^は傳^は返^は乎

○中古は冠

三長記^は長^は卿^は兼^は元^は二年^は十月^は廿^は六^は日^は東^は宮^は御^は儀^は流^は元^は振^は記^は云^は次^は加^は冠^は理^は發^は而^は人^は靴^は在^は退^は下^は者^は被^は受^は中^は北^は廂^は被^は改^は中^は衣服^は之^は所^は又^は内^は府^は大^は將^は自^は中^は之^は候^は此^は所^は被^は理^は改^は中^は又^は中^は冠^は令^は廣^は之^は中^は冠^は昨^は候^は卷^は礼^は門^は内^は是^は先^は例^は也^は取^は出^は針^は線^は等^は放^は延^は中^は冠^は閉^は付^は之^は少^は進^は棟^は基^は持^は冬^は了

今^は按^は之^は世^はは^は冠^はは^は即^は是^は放^は延^は冬^は也^は靴^は乃^は指^は毛^は今^はハ^は紐^はと^は細^は之^は綱^はと^は引^はま^はわ^は打^はを^は打

付きりきへて衣冠乃制古振うそハ侍

○貝記序

宣胤卿日記文明十二年三月十日云又貝五裏ノ歌ノ事自
二条安宰相方所坐書振の尋二条亞相一首時上句可
在右ハ事雖度々今書為後於今記之

同記長享三年八月九日云今日自中山黄門貝哥の御書
振支一条亞相返の如斯但貝左右者一書書之贈答
哥之之間贈右書左所書也古今意款書之

貝裏哥半左右一首を以て此書は右乃出貝上句

と云書は此の如く承りて忘却は

同記中ノ小

春聲

昔乃なる何れもさうしは此のこゝろ
あはれぬるも小月そはえり

夏色

光あはれかきり車はをぬるれ
うけてあはひうらふを耐えり

秋色

山ありはは海ありはははははははは
なまこりく小舟そはえり

冬月

心をく神ぬちうまゆりはははははは
おなうれたしゆやあはれくゆらぬ

春月

らば言の月と心とらふはははははは
色りたたま川やそははははは

夏声

いほよりうたふはははははははははは

あはせり思ふほこのやうな

心と宣流心乃歌なり

同記大永六年二月廿七日聖廟寺法樂和歌

閑庭落

かみそとて枕ぐんふれと一乃そき
風一切くまはるはゆりて 康親

名示

掛衣

けよゆみう地ゆまやま
月衣紋ゆりゆり 應献

深初

手鳥

ちけぬとてちかやゆらけあふ
弓の世知と流く 賢直

然意

そよほまうたつとちあふあふ
うみ成人よゆりて 倚俊

旅行

友多くて旅は花んかりとめ
あふ人ゆれとちまじし 御製

同

あふ人ゆれとちまじし 御製
今ゆりてちまじし 倚長

同

今ゆりてちまじし 倚長
よの中やちまじし 宗法

芳水

懐旧

涙とて世をこれす街のゆり
うれあふまはる心哉 康親

○仲麻呂詩

阿部仲麻呂ゆりゆをふれぬの歌を古今集に載せれを人
とねふりきり詩一首文苑華華二百五十一りてふり

卿命使本國

朝衡

唐ニテノ名ナリ或ハ
晁衡トモ書ク

卿命將辭國

非才忝侍臣

天中感明主

海外憶慈親

伏奏達金闕

駢駢去玉津

蓬萊御踏處

若木故園鄰

西望懷恩日

東歸感義辰

平生一寶劍

留贈結交人

款詢とのく一旨をうく天地の間を砂まると不可

思議は事なり

○伊勢乃上人

永祿元年日記祀名後六月音中山西相祀名被捨云

去月廿五日神宮社上棟無事今沙汰を由汲進有之或以

丘庄号上人

先皇御代被下上人
号女房初例也

名ハ一号慶光院以法因

勧進之方此上棟取立者也内々又内文上棟存立云雖不

相應之事末世此之儀神慮有子細先不測之事也

○後鳥羽院御製

奥山乃かち海うつとそあまをけて道ある世そく久よきと教

ふのみうとせ世はあふのち物ありふゆりくあまたあふ

にあいそと此神勢と相成しきりたかあはるかか

たれと内と人まはゆれとくはた一平下國家の御し

きる御身は神あり事付てこの世を以てふひりて神製

とすはる一伴一内一慈愛惻隱の心あつて年月た

た金うたをちめ多きりかあ川うらたあつ世そ人
志り事につるた—ようせつ八卯辰うさ海のはいとい
てにゆるた—

○相虫終む—

おのく夢あやうて名はらり笑とてく—
虫の免りちりいそむ—
禁裏院中にきき事—
ちかんとおひこきり

○三十六人集

先脚園珠庵契沖阿園梨のさく三十六人集をみづら
集せきもやり後よ人のり川たもりの貫く集や

の屋にらう—
はりなま事—
らさるにあ—
き文忠房—
きたる—
能さ—
きり—
ものなり—
をり—

ゆらみちた—
あひよら—

人不知なり

為意梅よりた先師の隨筆紙河社と名は家ありき
きり河社のまは紙をひよのまきんきり先師
西山公の秋菊系集をうらせたふ時命とらけて
大坂東より津なる糸珠庵乃かこりしは務宿一侍
月一河河社とて借り字一侍しと廿石川を
顔鏡とていふも念の記本なりそはけ三十人
集の難友とてしるべきなり今あらに裁をるハ
家見をまの曾て抄字一侍れらるるむ古堆中
あり一紙ありとて多字一侍らなり

○演ま

續日本後紀兼和十二年正月、伶人介後文在下尾浪連演ま
りもの百十と集りて帝はあたまを和風をあ樂を舞
にあらむとがまのあし一舞とりりて秋とまうとて
あされとていふもさるる草と木とあうゆの時よあまおそん
紀よま万葉あたまの文字と用られりそのあしとて百
十は歳よとあたり剛健なる老人なり

○くそ一記

古語拾遺中二首をね監下郡守のまをこれ死人を我家より
いふは新よ守のまをいふまも我家の門より隣の死人出た人や
あつちま一記のまをいふは守のまをいふは守のまをいふは
守のまをいふは守のまをいふは守のまをいふは守のまをいふは

ハ命もみ〜う〜はあ〜一紀事〜多物いぬハ命を
く子孫もけう抱いき〜物み〜さ〜人〜下界

今梅澤氏物語のあ〜あはよ〜一〜のん〜い〜河
これよ〜合〜海を〜

○代匠記乃序 西山云よきり
一序なり

契沖河図梨

西山云は梅澤氏を〜木尾より出て〜

美礼の河そのおれ尾より出て〜久〜記源の物記
乃道とあらり〜お〜い〜文の及〜おみ〜い〜
右と〜あ〜ふ〜川の車牛を〜け〜狹〜し〜
は〜ら〜持と〜て〜と〜は〜り〜さ〜び〜ら〜む〜
て菅の根乃まの目も〜む〜けの時〜一〜山

尾の秋は秋中も神よ〜の邊とあ〜な〜ら〜あ〜
亦も月言の時〜は〜る〜な〜けの甘〜あ〜橋川の阪
は〜か〜系〜林の枝〜あ〜い〜あ〜う〜海乃玉藤公の池乃水
う〜わ〜り〜と〜ら〜あ〜は〜い〜何〜い〜あ〜のう〜は〜
と〜れ〜あ〜は〜く〜は〜の〜さ〜〜神〜い〜た〜と〜り〜む〜
乃中〜い〜は〜て〜美〜系〜集〜と〜て〜あ〜い〜て〜ら〜
〜は〜ら〜い〜心〜〜〜あ〜は〜を〜ぬ〜ら〜む〜
よ〜あ〜此〜集〜は〜あ〜り〜守〜は〜月〜夜〜を〜あ〜れ〜
〜あ〜乃〜あ〜る〜雲〜た〜を〜目〜を〜り〜た〜れ〜な〜ら〜
〜せ〜い〜の〜も〜あ〜み〜〜と〜あ〜ら〜あ〜て〜
〜の〜水〜は〜〜〜下〜河〜を〜流〜〜の〜は〜

文ありて多くは乃集録とて一紙ゆたきひてられぬ抄の
くはなまよ一紙もが写らぬ事とてんもさるおまか
公地さくひてありて一紙もが写らぬ事とてんもさるおまか
手紙もあきありぬ事とてんもさるおまか
なごのしもゆらぬ事とてんもさるおまか
りぬ事とてんもさるおまか
きれぬ事とてんもさるおまか
きはぬ事とてんもさるおまか
かてぬ事とてんもさるおまか
海はぬ事とてんもさるおまか
まてぬ事とてんもさるおまか

ありて多くは乃集録とて一紙ゆたきひてられぬ抄の
くはなまよ一紙もが写らぬ事とてんもさるおまか
公地さくひてありて一紙もが写らぬ事とてんもさるおまか
手紙もあきありぬ事とてんもさるおまか
なごのしもゆらぬ事とてんもさるおまか
りぬ事とてんもさるおまか
きれぬ事とてんもさるおまか
きはぬ事とてんもさるおまか
かてぬ事とてんもさるおまか
海はぬ事とてんもさるおまか
まてぬ事とてんもさるおまか

今梅 西山は万葉のませなり半は席をとま
一かくたしむ流方れ才士とてはよりあまひてゆ流
河のめて秋新茶の十冊とてうゆせたりひるまは席
あくたれとて流を契沖よりゆたりまかゆりなれと

あれを契沖の謙匠の詞より二人の書物である物と云ふ
に契沖を今と云ふ一は後居つたる所と云ふ考へたる學
問よりき終て歎学れ才と云流小海と云ふ此所を今
居るとぬき出く古風なる筆山と云ふ也

梅の序又云縁のうらめしの作と云ふありきたり
く同古史と云ふと云ふつじした又云くいふ一書
乃若と云ふと云ふ 西山云ふあり一は新
と云ふ一 西山云ふ萬葉のとなふふ一は序
小のくく一を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
は此集を序の根原なりと云ふ一ありと終と云ふ
うと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

法書らゆゑ小款等ゆゑゆりゆりゆりゆりゆり

○傳國璽

三種の神器を傳國璽といふ人ありと云傳國璽なり小右記
小野宮
実資云長和六年正月廿二日云傳國璽式次大納言許波見
送傳國璽不知何物仍波尋其事天長十年記見大
契仍件記昨日送之即波式次了又云大倉下列左仗前
相持齋叙神璽及傳國璽と見えたり大倉二物なり

○官底

藏原抄准大倉乃下撤階奏連署之時波尋問官底と云
一たり官底と云ふと云ふ一と云ふ公卿補任弘安六年深基資
下撤階奏連署之時波尋問法家と云ふと云ふ 小右記寛仁

二年三月廿日、文が茂津領、叡山領、相論、而抑、天倉、
官府在天倉、又官府、案在官底、同礼大嘗令、事
官底、每例、云云、文、云、何、山槐、礼、仁安二年、四月、廿、日、
文、執、原、歷、年、始、改、始、于、今、懈、怠、歷、底、陵、遲、之、基、也、長、秋、礼、
后、官、史、
昨、時、卿、礼、
長、承、元、年、六、月、十、六、日、陣、定、文、長、和、官、府、案、同、大、嘗、
長、承、云、前、案、皆、在、官、底、
字、以、語、官、位、乃、程、
官、底、
中、書、
謂、之、
草、樞、密、院、
謂、之、
底、
司、
謂、之、
檢、
秘、
府、
有、

梁朝宣底三卷、
予讀梁宣底、
永叔所編、
中、
謂、之、
草、樞、密、院、
謂、之、
底、
司、
謂、之、
檢、
秘、
府、
有、

○撤酒券

右礼、
仁安元年七月廿日、
外礼、
史、
季、
俊、
持、
林、
撤、
酒、
券、
加、
署、
返、
給、
之、

○藍尾

山槐、
礼、
忠、
親、
公、
仁安二年六月廿日、
有、
藍、
尾、
大、
每、
取、
拘、
入、
酒、
於、
盃、
退、
立、
摩、
靴、
唱、
平、
以、
右、
手、
取、
盃、
飲、
之、
如、
元、
帝、
不、
復、
寄、
遣、
次、
又、
大、
每、
盛、
酒、
次、
第、
如、
元、
帝、
又、

飲之如此合三度也謂之藍尾也

家見作之藍尾乃字ハ
白氏文集にも見えたり

○秋の夕暮

秋の夕暮をゆく物よゆく赤澤浦の秋集よ人の橋
枝のありまのりをわけてたかきしる時

もろたあよとわゆる年をうれとて
秋の夕暮をゆく物よゆく赤澤浦の秋集よ人の橋

はましく柳の夜よけていかにまなる夜と柳よりあやふきと
川をたぐよむ向の心成別よとてうひした枝成く秋をなう
ましくて心成るほしくとてんとあやむるわきるハ情をしくし
わきしくいかにあやふきと葉まりにいりてう向ふ浦よ心さそ
舟人と情をしくいんとあやむるわきのうれとてあやふきと

用くもつとれまうあやふきと情をしくいかにあやふきと
とて柳の夜よけていかにまなる夜と柳よりあやふきと
ましくとて心成るほしくとてや法外納言もあやふきと柳
枝と柳のあやふきを成何よとてあやふきと柳の心成る

○節儉

西山公節儉なりとまらく天下に名をたしむるより士庶人よりあや
ましく儉約とせの法とて今や天下へとせゆりて人に
あやふきとて心成るほしくとてや法外納言もあやふきと柳
枝と柳のあやふきを成何よとてあやふきと柳の心成る
よその金用を費たりとてあやふきとてあやふきとてあやふきと
のらひりまはたた葉もあやふきとてあやふきとてあやふきと

風俗が健つゝ下をよるありあふと、及川らひの進献の
美とほく、一なるその執事と習の審にまゝとせよと
物とてつておひせの意はをらふ此向てしおひなり流
くほく、天下は窮困なるはとんやと、ふん成はるるを
代を治國の事とてかりたふ、ふん國を治るる
の加を國とて向てむと、その士農工商とて、ふんけり
一國の因循とて、ふん法年久しとて、ふん世とて
あり、舜禹の法は、ふんとて、ふん漢の
文帝の節儉とて、ふんとて、ふんとて、ふんと
して、ふんの事とて、ふんとて、ふんと
は、ふんとて、ふんとて、ふんと

小まといひて、儉約とて、ふんとて、ふんと
孫少卿とて、ふんとて、ふんと
向、ふんとて、ふんとて、ふんと
教、ふんとて、ふんとて、ふんと
わ、ふんとて、ふんとて、ふんと
と、ふんとて、ふんとて、ふんと
と、ふんとて、ふんとて、ふんと

新續古今雜

權中納言通俊

乃の世にわひなる、ふんとて、ふんと

文小集

うたて、ふんとて、ふんと

江都人の一とく我ら成は割とかりきめはも横外となく
成の漏るるを知らずし縁なるも然の如きまはくものも
たくりをて紙子のふまの二河のりりきくおきりるま
りり何のいしとくか毎の何事とるいゆりぬははしりり
侍ら申し書籍とよは友とるゆりぬははしりりぬまは
正思言くしりり江國江海のふたわぬい偽言の用を
比類とるし抄出は縁しむとをひきと佛書た用なりと
生久松の如きしりりゆまの道ちよ用なりとゆり侍
あゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
よあゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
た書とるしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは

あゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
先生とるしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
ひまゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
きゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
らゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
あゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは
年月日正思七年六月成とく病中にも横外とる醫美奴より
ひまゆぬははしりりゆまのゆりぬははしりりぬまは

ふのゆ書辭とく續ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
正思言のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

所へて心世間一切聲色嗜好洗淨一切榮辱得喪
看得破一多真の活處と云ふ也

文政十二年庚寅夏四月二十三日

中村直衛

年山紀聞 第三

目錄

- | | |
|---------|--------|
| 時代不同此歌 | 君主の明 |
| 疑りし此歌 | 古万葉集此序 |
| うけさし | 柳本入麻呂 |
| 山部赤人 | 猿丸古吏 |
| 世継とのかき理 | 尺八竹笛 |
| 志乃小草 | 中務集の歌 |
| 富士乃うぬ | 別戀 |
| 持統此御製 | 耕雲子首 |
| 神無月 | 安元三年の火 |

日本後紀此偽書

夫婦の別

漫吟集の序

女貧家

清少納言

撰て作者と定む

西山公此和文

同

安ふと無求

平家物語此撰

隠士長流

年山紀聞 廿二

○時代不同此歌

續後拾遺集

前中納言定房

一そらに人をも砂をもおろふれう川雲繩のそくをたのこ

雪玉集

前内大臣実隆

ちふとをけりぬあえり世の人たふよかた記聞のりこかな

よみ繩のそくをる心よりおろひよきはわたり川うらな

滅やちるこもり川まらやうり内きりゆらんおほ

らそ和歌ハ和言清涼して花鳥風月神祇秋教因

情の料とけりおひるこゆりきりたかた目玉こまひちり

け屋にこもるやうて燈籠傳あもをさくたうあ

日本紀竟寧和歌二卷を宗号に記す其終のうたなり
 又按て後撰と天智天皇秋の日記り後の庵の宮成りて
 其のふゆ智も日本紀中事記をくん載りてふゆ智新
 ともはらるるふ後の世は風とる由も是と歌に記すなり
 代々較撰の集りてふゆのふ撰名たらぬゆ味をり事おほ
 くらもれと一向もな月あくるくく　又いつく後代今集
 賀よ九月なりあり菊花と　聖武天皇
 百三記よりあひくるふ載れ記あひしうゆるるふは代の秋
 其の歌をくは何くあくるふゆも万葉集の載りあり
 後撰一首とれ　又新撰よりふふ下旨のゆありん

○古万葉集注序　又ハ枝葉拾葉集第一卷ノ
 載ラレクニ今畧ニ

其の一篇中御門宣胤卿の歌集と　西山公よりよゆ時
 東作よりそとあゆふてゆもさつり記のふゆはし
 中流過後日御弘資卿も記すゆをあひて枝葉拾葉
 集の巻頭小載きゆありつれ後万葉二十卷小載りておほ
 けい今よりふゆあふ不載りて後人の物事ゆきかたり宣胤
 卿もいゆら新葉とゆのきゆはるゆもくふのゆゆ
 えなふらゆはくゆれゆきまふ　一　また拾葉集より扱きて
 きくかほ　一　けい　一　既ハ巻覧よりりて持約せき方なきひ
 くらゆゆふゆをせらもぬき　秋新葉集れよりふゆ
 くらゆゆあゆをせらゆひぬあゆの序の事と後ハ新撰集も
 くらゆゆあゆをせらゆひぬあゆの序の事と後ハ新撰集も

○粟子

古歌ふる流しひしうわさしあくよあさうしん公さし
かとのふあさうしれと浦をも又を衣のうしんはしひしけ
はるそのちりも詩乃古島よ不屬于毛不離于裏さあるに
志はよあささす十はしんしんくしりあふよあさうしりさく
さよあふしん今さくあつ海しあり

○柳本入麻呂

日本紀古事記と考りに柳本氏孝照天皇の御子天足彦
王押人命乃後りちかく人丸の父也也也也人丸も國
史よんんん日本紀天武柳本臣援しよん人續日本紀元明
小和網元年三月は日下柳本朝臣依る卒しあり日合り

あれ人麻呂と回何ともあるあつひし伯叔父也也也也
りりけん柳本姓は日下と天武十年の朝臣と
賜りり續日本紀は聖武柳代は日下柳本朝臣建初後
中臣柳本朝臣漢名は日下柳本朝臣市守等あり孝謙の
沖代し柳本朝臣柳本朝臣小玉むりあり文徳天皇朝は
元年は柳本朝臣枝成とも入後後日叙ありあつれり
小人丸の子孫ともありしん万葉集は人丸の秋はみれ教
系系と標記したるちん裁れは天武持統文武朝の人を
聖武の沖代よそい命なりしあり万葉集はあつと津今奴
かきしゆりて崩天堯位卒位死人野の字みありなり
うりし人麻呂在石見國臨死かきとあれは六位下

なる半時よりあり奇しく秋万景に論せられたる今を
物類の趣と有り是れをゆゑにゆく半はきり又元明
天皇和銅二年に於て宗良平城遷宮たまひきれたるより
以下とありは神代より一古今集の序小宗良の神代は
おろしの位柄本人九かきとある時代を官位取より
考へらまきりありありのありは西史と万景も神代
なりりかして或は官庫小ひりゆをせよとふ事誰か
を考索よりありありゆゑにゆゑに又柄本人九かきの
事ハ拾遺集の卯ハ何れもたかなる物小みえに拾遺ハあや
まりおほきそのあり孝謙天皇に神代勝寶元年正月以て
七位下山口忌寸人麻呂が新羅使よりい袋草子に遣唐使

大伴宿禰依子麻呂が事代りの中上道人麻呂と人麻呂
とありかゝるは同族異人とのありはゆゑにゆゑに沙汰
せりて柄本人麻呂とせらるる一又古今集傳授の
系とて百年ありはゆゑにゆゑにゆゑに西三任
権大納言柄本人麻呂と書る物とありはゆゑにゆゑに人
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに
半後日ハ一松又進地ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに
て見ゆりハ一連がゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに
庵ゆゑにゆゑに牛庵と蒲郎の醫師ゆゑにゆゑにゆゑに
ゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに

○山部赤人

顯宗天皇御仲代小楠磨山月^{ツメ}自^{グツチ}小楠^{ツチ}より入^メ給^ケく山^ノ於^ケの氏と賜りりあり亦人毛^モなほ^トいふ^レも^トまあり^ト之
天祖宿位を國史へえん^ハ万系集の神龜元年より天平
以^テ手^ヲその^ノ款^ヲみ^テふ^リあ^レれ^ル人^ノ麻呂より^ハ後生^{ナリ}古
今^ノ序^ヲま^シ同時^ノ人^ノ知^ルに^ハあり^ト二人^ノり^テ法^ヲ玉^ノ乃
椽^目なり^トい^フ事^ヲい^フま^シける^ニなる^ニ後世^ノ好^ム恒^志奉^ノ
た^ルひ^ノま^りん^也一^ノけ^こも^初は^何所^ニか^んる^人を^身
但^一山^色と^いふ^ハある^ハあ^らな^りなり^山宮^ハ後^生姓^ノ別^{ナリ}
今^按万^系集^ノ序^ヲり^人伴^家持^ノ初^書ハ^初手^小選^山標^ト
門^ノ款^初と^いふ^ハ神^皇正^統集^林と^いふ^ハも^一つ^とあり^トハ^也
初^手の^名と^いふ^ハ世^ノの^りり^の事^{ナリ}

○猿丸女史

あ^の人^を戸^姓も^とて^ハ國^史万^系集^ノある^ニ物^ノ一^句沙^はな^り
多^ク古^々集^古名^序は^たた^と友^思と^いふ^ハ款^古猿^丸女^史と^いふ^ハ也^ト
と^みえ^る事^ヲも^とて^ハ猿^丸と^いふ^ハ名^ノ田^ノは^た一^首と^いふ^ハ左^ノの^後
よ^のあ^らは^れり^人の^いと^く猿^丸と^いふ^ハ款^とま^んと^いふ^ハ新^也な^り
公^任知^ノ撰^ハひ^とる^ハひ^とい^ふ事^ハ千^五百^文款^他の^あら^はれ^りに^ハ
猿^丸と^いふ^ハと^いふ^ハ此^ノの^いふ^ハ事^ヲも^とて^ハぬ^らし^めり^とい^ふ事^{ナリ}
あ^らり^とい^ふ事^ハ古^々集^とい^ふ事^ハ款^も撰^人も^また^ぬら^しめ^りと^いふ^ハ
初^手の^人を^いは^す集^はは^たた^と友^思と^いふ^ハ款^とま^んと^いふ^ハ人^を
と^いふ^ハあ^られ^る事^ハ別^ニ撰^ハれ^る款^とい^ふ事^ハ半^瓜古^々の^撰者^とも^も
之^レの^先遣^をと^いふ^ハ事^ハは^たた^と友^思と^いふ^ハ物^ノ公^任知^ノ撰^ハれ^る事^{ナリ}

こころのこころをわけておぼえぬ心定めしむるもや余の心とま
る富をよめりしむる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
人麻呂猿丸等流家集あはれとみれ万葉古今集れうら
よりぬきあはれとみれ人の心とまはる心とまはる心とまはる心
信用しむる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
あまの暮とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
こころありしむる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
はるる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
おぼえぬ心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
人の心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
是自然の心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心

多々み孫

山皇と秋とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
秋人あはれとみ

ゆく少の心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
秋とまはる心

秋二首あり又

是自然の心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心

藤原とまはる心

秋秋の心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
これよみ人あはれとまはる心とまはる心とまはる心とまはる心
しうに心をわけておぼえぬ心とまはる心とまはる心とまはる心

未入之次也、何事はあらざりとも、古よ入とあはれざるにそ
 れは、是貞親之の家、ありて忠孝敏のなま、今せん事
 知ふ、情こり、是貞ハ光孝帝第一の御子とす、帝母也
 光孝、この家、秋命、寛平年中の事とて、こり

○世継物語 今いさめ、葉を
よのりりたり

この物語、口と指とい門のころ、よか赤深、清の作、いなら
 る、そのころ、注の半、そのころ、目錄、葉園、巻、改、清、よ、赤深
 忠門記、とあり、為、草、は、ろ、く、方、よ、赤深、清、作、り、し、た
 時、代、の、あ、り、そ、う、は、あ、る、あ、り、し、た、お、あ、い、け、は、紅、考、一
 を、あ、ろ、く、と、彰、考、館、へ、納、せ、け、り、ぬ、半、な、り、き、れ、た、と、い、ふ
 の、ま、た、よ、く、大鏡、等、口、の、案、よ、世継、の、名、を、標、して、一月、宴

二部、い、さ、め、の、中、納、り、あり、あ、る、の、ま、た、名、改、年、一、よ、か、ん、れ
 葉、親、物、終、の、巻、ろ、く、は、あ、る、あ、る、と、改、世、継、の、序、と、い、ふ、お、あ、り
 きた、あ、る、よ、か、ん、れ、あ、ま、の、小、治、り、き、な、の、ま、よ、ん、け、ん、は、し、た、り、け、り
 こ、ける、名、を、世、継、と、し、た、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、
 せ、く、よ、か、ん、れ、物、終、と、あり、し、た、け、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、
 小、治、り、く、世、継、入、道、お、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、
 清、の、序、と、い、ふ、世、継、と、い、ふ、小、治、の、中、と、い、ふ、と、い、ふ、延、喜、の、り、堀、河、れ、光、帝
 け、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、
 う、れ、は、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、
 の、ま、た、よ、か、ん、れ、世、継、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、
 して、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、と、い、ふ、あ、り、し、た、

心押紙も世絶物縁ありとの葉も物縁あり

○尺八

源氏末攝衣小僧は沖あそひのうらひ大ひらたれくいられ笛
なとのあそびも縁ありのうらひつゝ世絶物縁あり内宴は
白河天皇の保元三年正月廿五日宴はありとあり尺八とい
ひ多吹とては笛のうらひつゝ世絶物縁ありとあり

今按尺八の笛ありとあり保元の中興とあり
いそは洞蕭といかり心越禪師かゝれき東坡亦題賦
その音取とて形容とて半あり此より洞固とては僧のよの
あそび吹て活斗のなるきりつゝ上内かゝれはあり
物のやうにありとあり或人のいふこと僧の尺八は

洞蕭とは形もわがしありとあり

○志乃畑艸 序

物有本末とあり大業のありとあり
いそはきぬふら津とありとあり

水戸は世子之位中將君

西山の沖練金おま公の沖橋沖といれは若宗沖あり
なほ子惠あり十月廿二日小菟たまた沖あり

信教のりこれ沖ありとあり
おほき書い公の書いといれ人といひといひ
むやらの十六字と法はありとあり
いそは氏の末裔といかりとあり
世子いそはとありとあり

毛斐あはれ君子はひいふまするへうはひとあふひもらん半志
かへりて志人の志の滅ぶるなるなりて一人その滅とあ
むらめ 藩府の冲政とたをもちて噴良政をく先士林の
をりて成正し民庶の志をたそひてはなりかの沖政
く紀のそしむれりて麻島かこみあみあ川小流波
根は木をた枝とそしむるなりひのこりて 世子はいふ
かここの沖政とあふまなりてんも志人の志をたそ
に依りてそいふ半あうなり

藤原為章

懐舊

高寿院

故中山備前守信成妻
故方守信敏養母

そら月お雲かたれめ一人世成をふ心うひてぬみなを

圓壽院

信敏実母
故方守信治妻

夢も今おふかきあけぬをたれびし志のふりてぬうまけさる

本智院

信敏姉信治女
中山幼解由正母

ほもをたれ夢もをたれうさあゆぬをのうつふ志あふさなる

瑞仙院

信敏姪故市正信行女
故方守信成妻

びりそをたれいさあぬまのふりぬありしをかそはあはれなりて

俊子

信敏妻福壽
信伊守元武妹

ゆききいそをたれふさふさのわをうけらつるをあはれにのち

鑑子

信敏養女
実信成女

はるくとうらあけりつるをあはれむしあはれゆりあはれ乃孫

黒田和氏中山
信成後下豊前守丹治志人直重

秋光一庭のちかちかむらさき木かげさしきね乃夕風

中山
信成下松波守丹治志人信庸

理のまに男をぬれひり君の心を成すのよるぬ海をうれ

丹治志人直正 中山勘解由

心はまをれぬものりり世成るふもかりいんそいさぬ

中山
信成下下野守丹治志人直好

とゆるぬ月日にそひてひり一と志のふもたぬあふれあふれ

山形
信成下主水山源義達

あはれとのゆらう病々うもふれむり成るたる昔のあふれ

藤原宗綱 信成下

うかりぬ世のちかちかむらさき木かげさしきね乃夕風

信成下
信成下吉房頭藤原友高

あはれとのゆらう病々うもふれむり成るたる昔のあふれ

久満丸 信成下
信成下信成下

あはれとのゆらう病々うもふれむり成るたる昔のあふれ

深和貴 山本勘平

流水のあはれぬものりり世成るふもかりいんそいさぬ

藤原重瑞 谷小島

せむしくあのをのちかちかむらさき木かげさしきね乃夕風

藤原光実 安藤内正

むらさき木かげさしきね乃夕風

源德基 山田新太郎

平のあはれ折ふはもつとかけおきてこれいづれめふふふ

平伊胤 白井忠左衛門

うらやまうらやまのさかやまはあつと清し一箇のひーかありは

源綱治 師岡與兵衛

そら一せはぢいしつもくをばふも程のよりある洞よりあふ

源之幹 之木左衛門

あひとまへあひまをうりしはけりあまの油うねきふ

藤原疎負 小野覚左衛門

けの同じちたれおをきりし世のあふめらぬまふふ

法橋怒安 竹田 怒安

あふまへあふまへとけりひねのまらけりあふまへ

法橋元昌 今井

あふまへあふまへとけりひねのまらけりあふまへ

田中通庵

けりまへあふまへとけりひねのまらけりあふまへ

吉田信翁

あふまへの油とくらねりあふまへあふまへのあふまへ

大橋徳甫

あふまへあふまへとけりひねのまらけりあふまへ

中原惟清 今井新平

あふまへあふまへとけりひねのまらけりあふまへ

源春可 狩野文八

きつあゝかきてきつあゝ人としあふまらぬむらゝりて

敬勝 国山次郎の書

ちりたるはむりたるせとまらゝりてとを思ふるゝりて

一成 林平四郎

りり夢のまらゝりてとを思ふるゝりて

源信行 山本政元

ちりたるはむりたるせとまらゝりてとを思ふるゝりて

菅原直宣 右見信光

ちりたるはむりたるせとまらゝりてとを思ふるゝりて

藤原為章 安原右平

ちりたるはむりたるせとまらゝりてとを思ふるゝりて

藤原治之 国見治平

かみか月何由りりり 君が代とまらゝりてとを思ふるゝりて

後醍醐天皇御宇丹治真人信敏

ちりたるはむりたるせとまらゝりてとを思ふるゝりて

寶永六年己丑孟冬十二日

水戸世子従三位行左近衛中將源公逝去其病間手書物有

本末事有終始知所先後則近道矣十六字藏之篋底

家臣没位下備前守丹治真人信敏偶聞其事切求得

之以為遺物恭敬珍藏追慕悲泣之餘分押其文字以

為額各作懷舊之詩而抑憂戚嗚呼在則人亡則書在

澤現存惟不能讀清容洋洋々必在其一二字一淚萬

感萬嘆察其哀情不堪哀痛余亦依其末備其貧
乃作一律以述餘意

天降龍種欲貽厥
墨瀋沆芳擣藻詞
羽林儀表武維揚
豈意常山主壁珍

寶永六年己丑仲冬

遠入佳城嘆鬱鬱
彩雲認跡留朱紱
宗室雋望氣未屈
埋光長作地中物

大學頭藤信篤

中村顧言新八郎

結萼映軒牖
桂菊未為偶

得有字

粲々園中梅
群芳欽歛襟

霜雪不得欺

中有荼蘼薰

明日春滿城

暴風無意思

幽人驚周章

桃李何多榮

洒淚訢蒼昊

寒禽迷空林

得本字

秀潤仰儀表

尚安奉晨昏

清標凜相守

臨風心期久

應在百花右

一朝委草莽

如失左右手

樗櫟何多壽

茫然空搔首

飛鳴每所有

安積覺覺云情

風範欽凝遠

省躬化宮壺

暇豫憂民瘼
豈意瓊樹姿
丹旄激悲風
帳望遼海鶴

得末字

冰輪上高空
入池舞魚鱗
天心從未至
懸象光彩沈
哀響虫添怨
錦帷仰遺影

彌縫敦邦本
摧折歸闕苑
總帷驚晚晚
雲霄何日返
酒泉弘孝考
明輝照毫末
微幽驚地竭
風悲雲霄々
萬籟歡聲過
哽咽情難奪
我懷靡由達

得事字

一朝玉樹摧
主鬯業未央
風鑑更英明
忠誠出孝心
藝圃曾精勤
馭臣恩有餘
養素遠浮靡
侍讀都如夢
永歎望帝傍

得有字

森尚禪
滿城盡哀毀
謝世仍何駛
天姿本純粹
武備兼文事
經筵恒講義
奉上敬每貳
好問納讜議
攀輶唯添淚
馨德欽所遺
中村惠迪 紋四郎

寂寥霜後園
美玉忽全埋
月沈曉鴈悲
往事夢漁史

得終字

雲昏天慘月朦朧
榮錫將膺青社寄
百年入夢就眠熟
愁似長江流不盡

得始字

三山不可航

滿目皆烏有
恩光長不朽
雨暗風葉走
醒來偏疾首
大井廣 equal equal

斷雁聲哀號北風
美才今見黑頭公
半夜無人鶴馭空
千迴萬轉幾時終
鵲飼真秦 推平
縹緲阻弱水

聞道瑤臺頭
鈞天星斗表
又傳張廣樂

云何每何鄉
冥茫音信絕
呼天天不應
明月如有意
霜淒心一愴
耿耿向向曙

得知字

公元園苑一仙子

鳴珂戲仙子
去入幾萬里
常寧軒轅氏
一逝到輒止
洋洋遠耶邇

憑誰當相理
低光照烏几
風葉鳴不已
何復故原始
一松拙又之進

十二樟中福祿茨

常辱侍玉席
風彩今如視
天何爾命何爾
縱然吹簫徜徉
逝者若逐流水
膏車百里及
千里萬里不得覓
只令人間有涕淚
得所字
德輝不久照
欽樂餘風光

講餘及我私
德容寧已而
由來受玉不早
餘韻遠不可知
解纜以自強池
策馬千里之
光陰代謝空相移
數字寓意一幅貼
松浦守約新之乞
仙遊候風舉
瞻望迷處所

行雲惹愁懷
悠悠寤寐間
得先字
夙為士民表
問寢孝子意
譬如卞氏玉
久要天下寶
常悲人事非
傍苑梅猶發
宿者欽娛物
音容每由覓

落雁送哀語
斷腸何夕緒
多湖直源三郎
聲望有誰先
謙抑德日全
韜光却粹然
奈何不壽年
忍看時序遷
入樓月欲圓
風流皆堪憐
此恨深九淵

峴山今在否

得後字

萬金擲冀北
爛斑雲錦色
餵以玉山藟
輕塵久不起
徐々按中道
一揮珊瑚鞭
縱爾朱汗滴
將橫行沙塞
感君愛可萃

有後碑可鐫

三宅緝明九十郎

六閑列殿後
色別成隊部
候飽親試走
涼蔭文槐柳
虬舞始蚴蟉
電影忽紛紛
兩轡齊在手
而圍獵楚藪
知我思難負

公子今何在

得則字

從器視瞻朝
多材兼韜鈴
既同抱鳥旃
拊膺呼蒼天

仰天酸嘶久

佐治昆理平次

後來何可則
餘事及翰墨
空教仰鴻德
浮雲慘無色
森保定丈助

得近字

美人錦瑟紅羅粉
尋跡無由入白雲

薄霧淡烟長袖隱

桃源路遠何山近

得道字

舊事風流迹如掃

小池友賢伊之助

蒼茫今世入愁早

王孫不歸春欲回

霜冷青州湖畔道

得兵字

木下寅亮 平三郎

淋漓遺塞鳳鸞翔

想見西園 公子美

星沒銀潢慘遂深

風摧玉樹情何已

呂臻大學寶藏家

蘇軾御書輝滿紙

盛德古今於不忘

忽然長逝維時矣

此一卷以志其弟之志也

信教之弟也

いんぐにやまひも由り

とせのまけひもあつらる

藩府の御用い

わくわくしるもやうく
ひらひとそらさるもわくわく
ゆるいあゆみはあひまひり
そへゆりあ

あつたお仲家れあきことあひまひ

まひりあつたお仲家れあきことあひまひ

○中野家集

袖ひりくうあつたお仲家れあきことあひまひ

わ代唐明宗敕解

獸英唐主曰不然朕昔嘗從武皇獵時秋稼方熟有獸逸入

田中遣騎取之以及得獸餘稼無幾以是獵有損無益故

内匠頭定
為相臣

とむ川ま〜兄弟をありのゆ〜るま〜り〜かた
為春馬〜十の六葉の法よりある人〜うむ〜ひゆり
てゆ〜いぬ〜いりてゆ〜のそま〜り子丑れ漏ま〜そここ
か〜ゆ〜る〜ま〜あ〜れ〜事〜ゆ〜同〜ゆ〜り〜に〜ゆ〜ハ育〜れ
湾〜ら〜も〜そ〜勝〜も〜ま〜な〜ん〜い〜か〜も〜急〜慢〜の〜ま〜い〜ま〜ゆ〜く
い〜ゆ〜も〜ん〜う〜ぢ〜い〜ひ〜て〜ゆ〜れ〜る〜あ〜い〜い〜ま〜ハ寛〜兼〜長
考〜そ〜そ〜ゆ〜り〜一〜神〜匠〜あ〜う〜ら〜し〜ま〜は〜ま〜あ〜あ

禁裏

院中法御舎小の久の外ハ〜う〜は〜あ〜と人〜ふ〜を〜ほ〜ら〜る〜事
あり〜い〜か〜い〜ゆ〜ゆ〜り〜ゆ〜に〜ま〜り〜ふ〜人〜と〜く〜ゆ〜一〜深〜氏〜ゆ〜結
小籠〜一〜て〜あ〜り〜ふ〜ら〜の〜窓〜あ〜ふ〜ま〜う〜あ〜く〜海〜ま〜れ〜け〜る〜家〜見
今ハ内匠頭定 法御舎今集傳按ま〜あ〜ゆ〜り〜ゆ〜ら〜ゆ〜ら〜れ〜ら〜ふ

年法の秋百二十首うづ〜とあゆ〜と〜ふ〜と〜と〜一〜法〜の〜火
災〜う〜う〜あ〜ひ〜ゆ〜り〜と〜る〜と〜志〜の〜一〜ま〜ゆ〜れ〜花〜標〜の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
竹ゆり今ハあゆ〜ら〜に〜あ〜ら〜ゆ〜ま〜ハ〜か〜き〜ね〜て〜ま〜子〜孫〜一〜か〜り〜て
写〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

○持統天皇

春とて夏きふ〜し〜ゆ〜妙の衣ゆと〜ふ〜あ〜ま〜ゆ〜わ〜く〜や〜ゆ
これハ万葉集第一ハ春とて夏來良之白妙能衣乾有
天之香来山之也と〜い〜ゆ〜ゆ〜割〜き〜ゆ〜り 西山ゆ〜ゆ〜秋法ゆ〜ゆ〜て
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜第2の向きま〜る〜し〜し〜う〜ま〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜け〜し〜し〜ハ集中の例也〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ハ流布のゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

あふりと息を――此沖製ハ衣ノの良者年山は宮小南志ま
――夏衣は――を友京の言より敵愾まりく――市郡
興るる由はそまほ中といふ義をれん文字のえか多るん
又人修てふき――也――るやにん敵愾の即無よしそむま
ぬる一字の向はほ――り或はわらりとも――とほむたひて
て――と然と古候をりそく思ひ――りつと世の今ほそふ
そり――もそ何れくけいふらんといふもこれとゆふ
争い古候ふて――り時代の風をうれて殊勝をりてて撰
兼に古候の詞とありて――て高村の風をうりて年まは
り――又此沖製と近代の語も本居もく山は雲たれむと
ゆふも何れも――り夏衣りてゆふもるるは白妙の

衣ははよりちちあふふやと耕――りふをるるは山は
安とてふ敵の有――候考られん今の際とてこの癖
案をりて――と按此沖製百人一首ふ裁てあまなく人は多り
たる所ふたあくえ右の正義を用ふる人といふやとて半付
作りぬ後は埃沖沙の百人一首改観抄といふ物と云はれ
は沖製とゆふと同一

○耕雲子首よ

三川のまゝ門田れ春うりこれなりかあくと秋とあはみて
五代後周世宗留心農事帝刻木為農夫蠶婦置之
殿庭すあ介在あたひおほ――尋て知――せとてひはくも
地となりて人民間の艱考とありて何れも終ふる――れ

とこのまゝ今とて阿まねく下の信成あるまゝわねはせ
くお有日の人うゝ成るひて用るらん主人の職いふた
ぢりよりお世とるたにこのおわふお願ひと忠と
はらひひておて下の信と肩すお忠人のいふと成る
はらひ耕をいふお長親にありおおはてお名をいふ人あり

○神無月

十月と神無月と名付るは奥義妙なるは月神無き月の
集りしゆふ名付るはありはあゝ昔今此月を神無月
へ法神ありありしゆふ名付るはあゝ昔今此月を神無月
西山とておお話の次てはまよかて作らるゝ万葉集第十三の
歌小霹靂之日香天之九月乃鐘禮乃落者とて小歌あり月令に

ハ仲秋之月雷始収聲と何れとて是は大方の年とて春の歌は
九月の月霹靂とありこれ十月ハ純陰の月なれ雷の聲
のとありありとありはあゝ昔今此月を神無月とて
やむる神とては後撰集にありはあゝ昔今此月を神無月とて
を井とてありとありはあゝ昔今此月を神無月とて
神とていふはありとありはあゝ昔今此月を神無月とて
はあゝ昔今此月を神無月とて

○安元は火

玉海安元二年四月廿八日云晴更人告云秋あり大は未済京中
人を多し焼七中殿以使者訪二位中将及源大納言等各
報云以存命為事云云納言文車六兩之内三兩全に其殘雖引

於輪破令燒失了云隆李の文書不殘一紙燒失了云又隆職
大書多燒了宮中文書拂底凡實定隆李資長忠親
雅賴俊經等皆富文書家也今悉遺此災我朝衰滅其期已至凡
又尹明之書字亦同時燒了云燒了所云大極殿下省院一切不殘
會昌門 應天門 朱雀門 神祇官 八神印正跡燒失
民部省 圖帳倉不
燒云云 主計寮 主稅寮 式部省 真言院
兩界曼陀羅
同以燒云 主水司 大學寮 孔子御教
奉取出 勸學院等云云
公卿之家中畧云外殿上人以下不知幾多凡東宮小路南宮南
西朱雀北大内併次燒亡古來未有如此事云云
按之傳小入み於古書の失亡と云々應仁の兵火瓜のこわり
ておけ安元の天災と云々此の災域の書りまゝ云々

源のきりぬりしはまの文書と云々神皇正統記のひはれ
日記款半なるなり云々

○日本後紀の偽書

日本後紀第十七云天長二年今歲浦島子歸郷雄略天皇御宇
入海至今二百四十七年也浦島子者丹波國の江浦人也昔釣得
大龜^{ウミガメ}成婦人國色無雙即為夫婦被歸^{カヘ}引級^{ウチ}到於蓬萊^{ウミノ}通
得長生報臺金闕新帳繡屏仙樂隨風綺饌^{ウツクシ}隨月居之三年春
月初暖春鳥和鳴煙霧瀟蕩花樹競開因歸歛之計歸曰到仙
陬一去難再來縱歸^{カヘ}於御定非^{ウチ}往日浦島子為訪親舊強催歸^{カヘ}駕
婦與一宮曰慎莫^{ウチ}用此卷不閑者自再相逢浦島子不在鄉林園零落
親曰悲七逢人問之曰昔聞^{ウチ}浦島子仙化而去漸過百年爰悵然如

失脚於耶耶心中大恠用運見之於是浦島子忽愛及衰光皓
白人不法而死

此一條不寫之幸は雄略記の言は浦島子も飯をたき遣
茶にふくはてし知もく入流を別を有りともはは世宗以
記しし書とありて又も又茶茶第九の初略が天長
より八遠の先小飯の國史は沖島さくわりの不富を幸はは
以後然なる史の文もひて万九の沖秋は山門加は成はは

右の契沖師より書とをせし物有り 西山公久しと
日本後記と據りし物ありしとまのむは得し物と
しし京作より一本ありしと彰考館よりしし味きりし
たりしとやし物きりしと信し契沖翁のそふ平と此

物もあつれしを記し沖師盤縁河川のたつ傳の中
にも浦島ありまは裁しあふたのそと天長は蓬萊より傳と
たりしは書しは此老師とかのな第は傳りしとととと
より契沖師盤の博士の合はたつ傳りの此傳を
いそが彰考館の学考よりならんやうそは此傳を傳つた
法人は何ものそや害と後世は沙も幸もれしはくむし
堪は罪人なり契沖師の家しし万九の書とを記し
浦島子の淳和の天長よりそふはあはゆりしとあつた
まは右の文章も國史は類せし書とありしはの日本後記
類聚國史は日本紀略は記ししはのそととある合は
いし川の流り結をそとゆらんむし梓乃の不目也

とよそのさるはひくもくの中へいんちんたのとはい
つゝはるをさるひつひつせあね世とるさうあつた
今よと後うはらわもやまに終へ心成るるる半あきか
やん人とは終へつゝもつゝいん人とはに終へつゝ
為章抄より長流に契沖くせあふ集りて序以作
契沖に長流に波後小家集とるひて序とかり
また終へつゝかれ万葉の古風は終へて近代の風成つゝ
いそ同氣あひつゝ耐久朋りて終へつゝ契沖師歌
山家のうら歌

忘れても歌のめいふさうめさけ風吹さらう歌の
山里よりおきくま業をすゝむらりおれおきにひら

教人をふら川を流し山よりたまたまあつた家集あり
山河の歌のうらと心つゝんとひつゝとるひつゝ
や山里のめい流は道のまほらうらひりひつゝなひた

迷懐の歌に中か

山あつたはますれぬこのゆゑ公の縁をち川きよ
ちあつたはますれぬこのゆゑ公の縁をち川きよ
いそつゝあつたはますれぬこのゆゑ公の縁をち川きよ

病一きり付

山里の業よりうらうらおらりの煙をたきし川をたき
ひらよりとねを誰とうらうら火の候あつたひりつゝ

曉東寢覺

少き一火の残る光乃わさう少と福さあお殿かかひかぬ
世中鐵僅おせ

かよく山民はうりりのとあるよる恒のころとたさうゆ
部うす

陰かけの駒はあねのみ波の上を舟やなうぬ世中せら
春のゆりゆり秋のあつさをいそ

春秋とくぬの山は花もみちかきと務とむたやう
述懐

由この初言とよそをぬるものさ月ふて舟か
二十九ふりり年

我身のまみそりもちるは極かたうりうりな三

題あつた

冬あつた越後の雪に我をれやうたうそをく世あもふか
かろくは老うは敷やまねかきんあつた志をうりあつた
足門のふねわくそふかと男ふたもりのりたうりあつた
おりてあつたのみさなはたうねあつた柳あつたはん
よれふたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
世の中はあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

○女貧家

陳蕃上疏曰又采女數子食肉衣綺脂油於食不可計
鄙諺言盜不過五女門以女貧家也今後宮之豈不貧國乎
略

この上流の好むものを用ひて書かれたる事柄と申すに接
し向う國家の事柄をせらるるおにえとの主人の精髄と
し向うしと深く會致りしはれまゝ高きとて
あるも文致とせらるる事なり

○清少納言

契沖翁のつくられたる清少納言の老のほの國の道はさ
多ういふなりさるる山鳥の尾の長永夜乎一
光の後よりわきゆりたり人の尋てまゝなりけしハ
清少納言

ふ人よもとえさういひぬ我をわづらふなりまは
此詞もふれぬのわづらふなりわづらふなり

○誤定作者

万葉集第十一 念友念毛金津足檜之山鳥尾之永夜乎
或中此亦小曰足日本乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎一
鴨將宿

この歌の作者未詳なりと云ふなりと新の歌集に云ふ人れと
或中此亦小曰足日本乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎
おのちよりむささびて同答れ歌の眉根搔鼻火紐解待分
下あのはる石上見柳を新古今人麻呂の歌中但し同答歌累載
於茲也とのときてと云ふなりと云はるるなりやまりて作者
と人れと定りしと云ふなりと云はるるなりと云はるるなり
弟をりとのときて中流のへく万葉集よりわづらひ

ふふふはくきいひて河原うらを

わらふはくきいひて河原うらを

今林 西山公のいひて河原うらを

たり 横州去年のいひて河原うらを

○梅花記

西山公

花村も月雪はつきと水漏門院のふらふらと物うら
まらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
こらてのやうのふらふらとて感ゆくはふふのふらふら
てまらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
やふらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら

とて感ゆくはふふのふらふらとて感ゆくはふふのふらふら
やふらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
てまらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
こらてのやうのふらふらとて感ゆくはふふのふらふら
まらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
花村も月雪はつきと水漏門院のふらふらと物うら
まらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
こらてのやうのふらふらとて感ゆくはふふのふらふら
てまらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら
やふらけけのやうとて感ゆくはふふのふらふら

そゆんこいんちうとまはていんけりひつたれを
おん即ちのまはてをさしとまはていんちうとまはて
そまやいのまはて何れもあつてまはていんちうとまはて
やひいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
かかひいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
そまやいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
えんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
いんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
つせとまはていんちうとまはていんちうとまはて

一ゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
一ゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
一ゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
一ゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
一ゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて

く秀ていんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
人のゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
かかひいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
そまやいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
あひていんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
ゆいんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
いんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて
いんちうとまはていんちうとまはていんちうとまはて

○安分無味

無名氏 鶴林ひ露

膠擾勞生

待足後何時是足

據見定隨家

豊儉

便堪龜縮

得意濃時休進步

須

知世事多翻覆

謾教人白了少年頭

徒碌碌

誰不愛黄金屋

誰不羨千鍾禄

奈五行不是

這般題目

枉費心神空計較

兒孫自有兒孫福

也不須採藥訪神仙

唯寡欲

ちかこら法水谷亜相實業郷江ぶあえ

おりのねあうぬ心よ海をてハ身が注しく小はるぬ福ひと

○平家物語語 契沖所抄

子載集にみふたけ申けり時鳥羽殿よきことなすり
たうは池と花とつる心はと海と流るる

院中製

池あり小江乃橋ありきとてちかこらねをいかりけり
あまの平家物語より大京平幸の道しと海と流るる

半のねりふそのり子載集のなむ流布あり
平家の伝名人の傳(あやうり)なまにあらざるなり

○隠士長流

わらふ耐々下河色考六共平々名者より和別なぬ度又小崎
氏名義忘りのりり母の氏とる人ゆりける日より妻子をじ
て中年より津乃園莊波のめとくに徳成と云え静に書み
中にも歌事とてたふ万葉集なま集伴物終るハ晴記
たりるは学問のばけり同そとち取の富人かぬかきと
おれとて得せなぬ人かきと心のせぬ折の富家
振ふと應え訪来まふ人を物とて守ぬとて高しとて
ひを眠り或い書をよみて心よゆきとてなり 西山公

本紙一巻一巻してむけきも終ふるはありしは紙巻
紙の油をりて万葉集紙をもしるふもくもあひひきあふ
時々一二首は紙にてもまはらかりにゆきまはらゆ
して貞享三年丙寅六月三日方ゆりゆりぬ^{六十}歳因珠庵の
契沖師とまゝのりあふりぬれ遺稿とありて晩華集
に名つるあり此の集の中れ歎

述懐のりし詩を

松川之流よわき一枝とさくまぬありかたき月みば
あはつゝのあきふいさきふのまゝにわたりあふ
よみよむ我ののまはりまはれうかきぬ一任者の神
和方浦とありぬ板井の晴くまのまの好まむありぬ

よらぬ油のりしむきても紙のまや心きくはのあふこれこ

末れ集の歎きのびにれ歎ふはくたけりぬくこもあ

難波津のをれなりあふあはげの末乃世ふくこも紙とのま

契沖の山よわかれともあふ神話のあふ世の中ふらあふ

ふま山柳のあふたあふてくたけぬあふあふ

あふとあふて

世にうみのあふりしそあふりしあふの山柳のあふあふ人

契沖のあふあふ新とあふの國あ郡久井とあふ山里

あふあふれあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

山店をむくあふあふあふあふあふ

世の中はさういふ世と云ふ世といふ世のさういふ世といふ世
契沖の山屋さういふ世といふ世のさういふ世といふ世
けしに春はさういふ世といふ世のさういふ世といふ世
さういふ世といふ世といふ世といふ世といふ世

そのあつた

若きとき久井のさういふ世といふ世といふ世といふ世
山家のさういふ世

うーととも宿ありさういふ世といふ世といふ世といふ世
世の中は波のさういふ世といふ世といふ世といふ世
信山さういふ世といふ世といふ世といふ世

山里のさういふ世といふ世といふ世といふ世
手さういふ世といふ世といふ世といふ世
さういふ世といふ世といふ世といふ世
若きときさういふ世といふ世といふ世といふ世
世といふ世のさういふ世といふ世といふ世といふ世
捨るさういふ世といふ世といふ世といふ世
常業さういふ世といふ世といふ世といふ世
今さういふ世のさういふ世といふ世といふ世といふ世
為章梅さういふ世といふ世といふ世といふ世
儒学さういふ世といふ世といふ世といふ世
けしにさういふ世といふ世といふ世といふ世

人取らりけししは依り出作の累唐集萍水集續歌
林良林枕詞獨明抄万葉名寄等なり

文政十二年庚寅笈四月廿九日

中村直衛

